

## 学位記授与式式辞（令和2年度）

令和2年度 学位記授与式にあたり、お祝いの言葉を申し述べます。

修了生、卒業生の皆さん、そしてご臨席賜りました保護者、ご家族の皆さま、オンラインでご視聴の皆さまご卒業おめでとうございます。

今年、本学から、大学4学部1192名、短大2科177名、大学院では4研究科16名、計1385名の学生、院生が卒業していきます。

昨年は令和初の学位記授与式でしたが、残念ながら新型コロナウイルス感染症拡大を受け中止を余儀なくされました。その後、緊急事態宣言発令を受け、学校は授業実施に大きな制約を受け、また、本来楽しいはずであるサークル活動など学外活動も自粛をお願いしました。皆さんは大学に来ることを大きく制限され、また日常生活も不自由を強いられて、苦しく辛い思いをされてきたことと思います。

私たちは、この一年、我慢を重ねてきました。やっと夜が明けるかと思えば、再び緊急事態宣言が発令され、さらに再延長されるという事態を受け、本日このように制限された形の学位記授与式となりました。それでも昨年に比べれば少し前進したと言えますし、今この卒業式の場にいる皆さんには、よく頑張ったね、おめでとうと言いたいと思います。

また、この晴れの日を心待ちされていた保護者・ご家族の皆様には、教職員一同、心よりお祝いを申し上げるとともに、これまでの厚いご支援に対して、感謝の意を表したいと存じます。

さて、皆さんが生まれ育って来られた時代は、V・U・C・A、ブーカの時代と言われます。Volatility（激動）、Uncertainty（不確実性）、Complexity（複雑性）、Ambiguity（不透明性）、という四つの言葉の頭文字のV・U・C・Aをとってブーカの時代と言い、近年、ビジネスの世界でしばしば使われる言葉です。平成の時代は、天災が多く、社会情勢の変化も激しい時代でした。文字通り「美しくなごやかな」時代を期待して「令和」と名付けられた新しい時代が始まりましたが、新型コロナウイルス感染症が世界を覆い、あらためて現代がブーカの時代であることがより鮮明になっています。

この一年間、皆さんには理不尽なことばかりだと思われたでしょう。

しかし、社会は、コロナ感染症ばかりでなく理不尽と思える出来事に満ちているとも言えます。皆さんはこのような社会を避けて通ることはできません。

しかし、本学を卒業した皆さんには理不尽な社会と闘う二つの力がそなわっていると私たちは信じます。

一つ目は、誠実であり勤勉であることです。例えば新型コロナについて言えば、世の中に飛び交う風説や風評に惑わされず、自分の行うべきことを誠実にそして勤勉に行うことです。新型コロナを自分の問題として引き受け、他人にゆだねず自分で考え行動すること、手洗い、マスク着用、社会的距離を保つことなど、地道に行うべきことを勤勉に、そして誠実に行うことです。誠実・勤勉は本学の教訓ですね。

二つ目は他者を思いやり助け合うことです。本学では昨年の4月から副専攻としてリーダーシップを掲げ、他者と協働してリーダーシップを発揮する力を養うことを明示しましたが、この教育方針はすでに昔から共立の教育にあったものです。その根本にあるのは本学の校訓の一つである友愛です。この感染症はだれでも罹患する可能性があるものです。感染した人を責めるのではなく、思いやる気持ちが友愛です。今、社会のあらゆる領域で分断が進んでいると言われます。特に目に見えないウイルスの脅威は、ややもすれば異質な者、弱者を排除する力を強めがちです。だからこそ友愛による他者への思いやりが大切になります。

コロナ禍というストレスの多い社会にこそ本学の校訓である「誠実・勤勉・友愛」という徳目は輝くのではないのでしょうか。

春はまた巡り来ますし、やがて社会は復活するでしょう。

今は、こうして学位記授与式を開催できることを静かに喜び、医療従事者を初めとする日常を支え続けるエッセンシャルワーカーの皆様に、あらためて感謝の意を表し、私の式辞とします。

ありがとうございました。

令和3年3月15日

共立女子大学 共立女子短期大学

学長 川久保 清